

# 自閉スペクトラム症児における役割交替模倣の能力と社会的行動

桐村 真優

役割交替模倣とは、ある行動を模倣する際に<する>という能動的な役割と<される>という受動的な役割の交替が起こるものであり、Tomasello (1999/2006)は三項関係の共同注意が役割交替模倣によって成り立つと述べた。自閉スペクトラム症(ASD)児について役割交替模倣の能力を実験的に検討した研究は少ないが、三項関係の成立に困難が認められることから役割交替模倣においても障害を示すことが考えられる。また、共同注意能力は後の社会的能力の発達に影響を与えることから重要な「基軸スキル」であり(Charman, 2002)、その改善が他の社会的能力の広範な改善と般化を生み出し続けるとされており、ASD 児の役割交替模倣能力の実験的な検討は有用であると考えられる。さらに、川田(2011)は役割交替模倣を第一次役割交替模倣と第二次役割交替模倣の二つに分類しそれらは異なる質の対人的行為であるとしたが、その両方の段階の役割交替模倣能力を検討した研究はない。また、定型発達児において乳児と母親が役割交替を通じてお互いの距離を縮めていくことが示されており(川田・塚田・川田, 2005)、役割交替模倣能力は社会的行動と関連していると考えられるが、ASD 児のコミュニケーションについての障害が顕在化すると考えられる集団療育場面での社会的行動を記録し、役割交替模倣能力との関連を検討した研究はない。そこで本研究では、研究Ⅰで ASD 児の役割交替模倣能力を実験的に検討し、研究Ⅱで役割交替模倣能力と集団療育場面での社会的行動との関連を検討した。研究はすべて A 児童発達センターにて行われた。

研究Ⅰでは、実験的手法を用いて、第一次役割交替模倣得点と、第一次役割交替模倣課題および第二次役割交替模倣課題の得点を合計した役割交替模倣総合得点を算出した。川田(2011)によると定型発達児において第一次役割交替模倣が成立するのは生後9～12か月、第二次役割交替模倣が成立するのは生後18～24か月である。対象児の発達年齢は10から38か月齢(平均 $22 \pm 7.55$ か月齢)だったが、第一次役割交替模倣が成立した児は3名、第二次役割交替模倣が成立した児は1名のみであり、ASD 児は発達年齢が同程度の定型発達児よりも役割交替模倣能力が低い傾向が認められた。また、各得点と心理アセスメント結果との相関分析を行った結果、共同注意能力および言語能力が高い児は役割交替模倣能力が高いことがわかった。

研究Ⅱでは、研究Ⅰで用いた実験場面での測定結果と、1人につき15分間の行動観察により算出した集団療育場面における ASD 児の社会的行動の生起頻度を用いて分析を行った。各行動の生起率について因子分析を行った結果得られた、第一因子「他者との相互交流遊び」因子得点と第一次役割交替模倣得点および役割交替模倣総合得点との間に相関がみられ、実験場面で示す役割交替模倣能力が高い児はより社会的に高度な遊びを行っており、他児との相互交渉も多いといえた。

最後に、「語彙の発達が第一次役割交替模倣の能力に影響を与え、さらに第一次役割交替模倣の能力が遊びにおける他者との相互交流遊びの生起頻度や表出言語の能力に影響を与える」という仮説に基づき、言語・社会領域発達年齢、第一次役割交替模倣得点、第一因子「他者との相互交流遊び」因子得点、表出言語得点からなるモデルを共分散構造分析を用いて検討した。その結果、語彙能力が第一次役割交替模倣能力に影響を与え、第一次役割交替模倣能力が表出言語能力と集団療育場面における他者との相互交流遊びの生起頻度に影響を与えるという可能性が示唆された。しかし、モデルのあてはまりは良いとは言えず、再検討の必要性がある。(比較発達心理学)